

# 「南柯太守傳」の夢について——離魂譚としての視點から——

森 英 雄  
門 脇 廣 文

はじめに

「南柯太守傳」は中唐の李公佐の作とされる小説で、淳于棼という遊俠の徒が、槐の木の下で晝寝するうち、夢のなかで蟻の國へ行き、國王の女婿となって南柯郡太守に任命され、二十年餘りを過し、やがて現實の世界に戻ってくるという話である。

この「南柯太守傳」は、沈既濟の「枕中記」と比較されることが多く、夢での出來事を中心に据えた展開や、人生の儚さを主題としている點などが共通しているとされてきた。一方、兩者の相違點も指摘されており、森本早織<sup>1</sup>と下定雅弘の兩氏は「盧生は何を知ったのか?——『枕中記』の主題」<sup>2</sup>において、それぞれの主題の違いに注目し、風刺や批判の對象が異なっていると述べている。

このように、「南柯太守傳」については、これまで主として「枕中記」と比較することによって、この兩者のストーリーや主題の共通點あるいは相違點に關する研究がなされてきた。しかし、「南柯太守傳」を読み進めていくうちに、

論者はある疑問を抱かずにはいられた。それは、主人公淳于棼が見たとされる夢の世界は、「枕中記」の主人公盧生が見た夢の世界と同じものであるのかということである。なぜなら、「南柯太守傳」において主人公淳于棼が見た夢の世界には、「夢」と呼ぶには不可解な點が幾つか存在するからである。

そのことについて論ずる前に、黒田眞美子氏の「あらすじ」<sup>3)</sup>を引いて、「南柯太守傳」の概要を示しておきたい。

江南の侠客、淳于棼は住まいの南にある大きな槐の古木の下で酒に酔いつぶれ、介抱されて横になると夢うつつになる。使者が来て槐安國に招かれ、國王の次女と結婚して、南柯郡の太守（長官）になる。二十年間、郡をよく治め、宰相にまで出世して、子寶にも恵まれるが、檀羅國との戦いで大敗し、妻も病死する。妻の葬儀のために辭職して、都に歸る。都での彼の權勢を恐れた王は、三年後の再會を約して彼を歸郷させる。見送りの使者に大聲で呼ばれて目をさました彼は、夕日がまだ沈んでいないのを見た。槐の木を調べると、槐安國とは木の下に蟻の巢だった。三年後、彼は自宅で亡くなった。

この「あらすじ」から分かるように、淳于棼が目覺めた後に探し當てた蟻の巢は、現實の世界に存在したものであった。すなわち、淳于棼が二十年餘り過ごした「槐安國」は、「枕中記」で盧生が過ごした世界のように夢の中にしか存在しないものではなく、現實に存在したものである。

そこで小論では、淳于棼が夢で見た世界は、盧生が夢で見た世界と同じものであったのかどうかについて検討を加え、その上で、淳于棼はどのようにして「槐安國（蟻の巢）」に入って行ったのかについて論者の見解を述べたいと思う。

## 1 淳于棼の夢と盧生の夢の相違について

「南柯太守傳」と「枕中記」は、たしかに、主人公が現實の世界から夢の世界へ行き、そして再び夢の世界から現實の世界に戻ってくるという展開になっているが、ここでは、「枕中記」と比較し、淳于棼が見たとされる夢の世界が、いかに盧生が行った世界とは異質であるのかを浮かび上がらせ、その特徴を明らかにしていきたい。なお、論者は、淳于棼が行ったのは夢の世界ではないと考えているが、ひとまずは從來の見解にしたがって夢の世界に行き、そして夢から覺めたものとして論ずることとしたい。

(1) 夢からの覺め方と夢の世界と現實の世界とのつながり方の相違について

「南柯太守傳」の淳于棼と「枕中記」の盧生という二人が見た夢には、大筋として、現實では到底かなわないような立身出世を夢の世界で體驗するという共通点がある。だがこの二人が見た夢には、夢からの覺め方と夢の世界と現實の世界とのつながりの深さにおいて看過できない相違点がある。そこで、まず夢からの覺め方に注目して見てみたい。

1

「枕中記」の盧生は夢の中の官界で浮沈を繰り返しつつも、最終的には榮華を極めた人生を送って八十歳まで生き、病氣に罹って死ぬ。そしてその瞬間に夢から覺めるのである。それに對して「南柯太守傳」の淳于棼は、同じく夢の中で榮華を極めた生活を送るが、途中で槐安國王に疎まれ、半ば強制的に現實世界へ歸らせられ、そして夢から覺める。

ここには、夢の世界で死ぬことによって夢から覺め現實の世界に戻るといふのと、夢の世界から歸ることによって夢

から覺めるといふ相違點がある。つまり、「枕中記」の盧生の場合は夢を見る前に本人が望んでいたような榮華を極めた人生を送った後、そのまま終焉を迎えるという形で終わっているが、「南柯太守傳」の淳于棼の場合には、國王の考えによって強制的に現實世界に歸らせられ、そのことによって目覺めさせられるのである。目覺め方に根本的な違いが見られる。

## 2

次に、夢の世界と本人とのつながりの深さについて見てみたい。「枕中記」の場合、夢から覺めると、そのちの夢の世界がどうなったのかについては語られず、そのまま物語が終わっている。夢の中で死ぬことで夢の中の人生が完結し、盧生と夢の世界との間のつながりは完全に絶たれる。それに對し「南柯太守傳」の淳于棼の場合は、目が覺めたあと、庭の槐の樹の下の穴から自分が經驗した「槐安國」(實は蟻の巢)が見つかっており、夢から覺めた後も夢の世界とされていた「槐安國」が現實世界の中に存在していたのである。

それだけではない。淳于棼は現實へと歸る際に槐安國王から「三年経たら迎えに行かせよう。」<sup>(1)</sup>と言われるが、この言葉通り、淳于棼は三年後に亡くなるのである。つまり、夢から覺めた後も、淳于棼は再び槐安國に行くことが(實は、死んであの世へ行くということだったのだが…)約束されていたのである。したがって、淳于棼の夢の中の人生は目が覺めた後も完結していなかったと言える。「枕中記」の盧生の夢の中の人生は死ぬと同時に終わったため、その後の續きも無く完全に終結しているが、淳于棼の夢の中の人生は中斷されたままであり、國王が言った「三年後に迎えに行かせよう」という言葉からも分かるように、淳于棼の見た夢の世界は、目覺めた後においても現實の世界と深くつな

がっていたのである。

以上の検討から明らかのように、「枕中記」の盧生は、夢の中の人生を自然な形で終わらせており、その時點で夢の世界と本人とのつながりが断たれている。そのため、夢の世界と現實との間には全く接點が認められない。一方、「南柯太守傳」の淳于棼は、槐安國王の命によって夢の中の人生を中斷させられた状態で目が覺めたのであり、その結果、夢から覺めたあとも、夢の世界と現實の世界との間に深いつながりのあることが見て取れるのである。

それでは、淳于棼が生きた夢の世界において認められる現實世界との接點とはどのようなものなのか。次にはそのことについて見てみることにしたい。

## (2) 槐安國と現實世界との接點について

論者は、以下の三點が淳于棼の見た夢の世界と現實の世界との接點であると考ええる。

- ① 槐安國の存在した場所
- ② 淳于棼の結婚式において數人の女性たちと交わした會話に認められる事實
- ③ 友人二人の夢と現實での狀況

①の、槐安國の存在した場所については、すでに述べた通り、淳于棼が夢から覺めた後、現實世界で「槐安國（蟻の巢）」を見つけているので、槐安國は現實世界の一部だったと言える。そしてこのことは、淳于棼が見た夢の世界とはいったい何だったのかという疑問を生じさせるが、そのことについては後に改めて述べることにし、ここでは残りの二

つについて見ていきたい。

1

②の「淳于棼の結婚式において數人の女性たちと交わした會話に認められる事實」というのは次のようなことである。淳于棼が槐安國に着いたばかりの頃、槐安國の國王の娘と結婚するのだが、その宴會の場面で數人の女と會話を交わす場面がある。

すると一人の女が彼に聲をかけた。「以前の三月三日、私は靈芝夫人のお伴をして禪智寺に参りましたが、天竺院で右延が婆羅門の舞を舞うのを見物しました。私は他の女たちと北の窓際の石の腰かけに座っていたのですが、その時、あなたはまだお若いのに上手に馬に乗って見に來られたの。なんだか強引に一人で近づくと、なれなれしく話しかけて私たちをからかわれたわ。私と妹分の窮英さんと赤い手ぬぐいを結んで竹の枝にひっかけたけれど、そのこと覚えていらっしゃるかしら。それから七月十六日に孝感寺で上眞子さまと落ち合って、契玄法師が觀音經を講釋されるのを聞きました。その折、講釋の席で私は金の鳳凰のかんざし二本を喜捨し、上眞子さまは水犀の皮製の箱を一つ寄進されたの。そしたら丁度その時、あなたも講釋の席にいらして、法師にお願いかんざしと箱を見せてもらわれたわ。長い間、ためつすがめつしてから、私たちに向かって、「人といふ物といひ、とてもこの世のものとは思えない」とおっしゃったの。そうして私の名前や住まいを尋ねられたけれど、何も答えなかったら、未練たらたら、ずっと私から目を放されなかったわ。そのこと覚えていらっしゃらないの」。彼は「心中秘めて、一日とて忘れたことはないですよ」というと、女たちは「今日あなたと親類になろうとは思ひもよらなかったわ」と

口々に言った<sup>5</sup>。

この會話によると、淳于棼は現實世界において槐安國の住人と出會っており、淳于棼自身もそのことを覚えていたということになる。このやり取りの中で登場する「禪智寺」とは、杜牧が「題揚州禪智寺」という詩を残していることから分かるように、揚州に實在した佛教寺院である。「昨上巳日」がいつを指すのかは不明であるが、淳于棼はかつて現實に存在する「禪智寺」という場所で、夢の國である「槐安國」の住人と會っていたということになる。

そのことは、また、現實世界から槐安國へ、そして槐安國から現實世界へと往復することが可能だということの意味している。そうであったからこそ、この物語の終盤において淳于棼は槐安國を掘り當てることができたのである。もし、槐安國が夢の中にだけに存在する架空の世界であれば、そのようなことはできない。すなわち、淳于棼が目を見ましたときにも、槐安國は現實の世界において蟻の巣のまま存在していたということになる。

それでは、そのような現實にある蟻の巣に、人間はどのようにして入って行くことができるのであろうか。もちろんそのままでは入って行くことはできない。そこに入って行き、その住人として滞在するためには何らかの出来事がなくてはならない。それでは、その何らかの出来事とは何なのか。それは、ふつう眠って夢を見ることということになっている。しかし、論者は、そうではないと考えている。そのことについては後に述べる。

2

③の「友人二人の夢と現實での状況」というのは次のようなことである。槐安國では、田子華と周辨という淳于棼の二人の友人が登場する。そのことからすれば、「槐安國」(蟻の巣)は、淳于棼だけが入り込み、そして滞在することの

できた空閒ではない。

この二人は、淳于棼が王族の娘と結婚し、南柯太守に着任するときに淳于棼に抜擢され、それぞれが要職に就いて淳于棼を補佐するという役割を擔っている。

このような役割を與えられている二人の友人の内の一人である周辨は、檀羅國との戦いの後、背中にできた腫物によって病死してしまう。一方、田子華は、その後も生き延び、淳于棼が太守を辭任し王都へ戻っていく時に南柯太守の代行を任される。槐安國における田子華のその後の消息は作中に出てこないが、死んだという記述も見えない。そのため、こちらは淳于棼が日覺めた後も槐安國內で生きていたものと思われる。

槐安國においては、このように淳于棼と關係をもつ二人であるが、その時、彼らが現實世界においてどのようなかについては、槐安國における記述からは見出すことはできない。しかし、淳于棼が夢から覺めた後の記述から現實世界での彼らの様子を知ることができ、そのことはきわめて重要な意味を持っている。

夢から覺めると、淳于棼は、田子華と周辨の二人の様子を確かめるために使いをやっている。そして、夢の中で死んだ周辨は現實の世界でも急病で亡くなっており、一方、田子華は亡くなってはいなかったが、病に倒れたまま意識不明の重體となっていることが分かったのである。このように、淳于棼以外の人物も槐安國での出來事の影響を強く受けており、周辨に至っては槐安國での死因と現實世界での死因がほぼ一致している。

すでに見てきたように、槐安國の住人（實は蟻）が槐安國と現實世界を行き來していること、槐安國自體（實は蟻の巢）が現實世界の一部であったことなどを考慮に入れると、槐安國は、盧生だけが入ることのできた世界ではなく、他の人も入って行くことのできる空閒だったと言える。つまり、田子華と周辨の二人も槐安國という空閒を、同じ時に、淳于棼とともに生きていたのである。



これらのことから、「夢の中の國」とされた「槐安國」は、實は現實世界の一部であり、槐安國での榮枯盛衰は現實世界での出來事であったため、夢の内容が現實に影響を及ぼしていたのではなく、すべてが實際に現實で起こっていた事實として語られていると考えられるのである。

ただ、おそらくすでに死んでいるものと思われる淳于棼の父と、手紙のやり取りが槐安國ではできたこと、淳于棼が死ぬ年を槐安國王が豫言していたことなどからすれば、槐安國は冥界とつながっていることが読み取れる。槐安國とは冥界とつながっている「三途の川こちら側（現世側）」なのではないだろうか。

以上のことをまとめると、槐安國とは以下の五つのような空間であると言える。

- ① 現實世界に存在する空間である
- ② なんらかの條件を満たせば、淳于棼以外の人物も入ることができる
- ③ 槐安國の住人は現實へ行くこともできる
- ④ 槐安國で死ぬと現實でも死ぬ
- ⑤ 冥界とつながっている

ただ、もし槐安國が現實の世界であるとするなら、いくつか疑問が浮かび上がってくる。まず、仙人や妖怪であるならばともかく、何ら特殊な能力を持たない普通の人間である淳于棼およびその友人達は、どのようにして「槐安國」へ入って行けたのであろうか。それは、ふつう、眠って夢を見ることによってだと考えられる。しかし、淳于棼は夢を見たのだろうか。次には、それについて考えてみたい。

## 2 淳于棼は夢を見たのか

淳于棼は夢を見たのだろうか。そのことを確認するために、まず、淳于棼はどのようにして槐安國から現實の世界にもどったのかを見ておきたい。

(1) 淳于棼はどのようにして槐安國から現實の世界にもどったのか

淳于棼が槐安國から現實の世界にもどったところは次のように記されている。

二人の使者は彼を車から降ろした。彼は家の門に入り、そのきざはしを上ってみると、自分の體が、表座敷の東の軒下に横たわっている。びっくり仰天、恐ろしくて前に足が進まない。

上に挙げたシーンには、まるで淳于棼が二人になっているかのように描かれている。家の軒下に横たわっている自分と、それを見ている自分である。見ている自分には意識はあるが、横たわっている自分には意識はない。つまり、淳于棼は酒に酔って意識がなくなり、二人に分裂して、一方が槐安國に滞在して出世を體驗し、もう一方は眠ったようになって家の軒下に横たわっていたということである。

これとよく似た現象を描いた物語が唐代傳奇の中に存在する。あらためて言うまでもなく、それは「離魂記」である。次には「離魂記」と「南柯太守傳」の共通点について検討するが、その前に一つだけ確認しておきたいことがある。それは、淳于棼が酒に酔って横になったときの表現である。それは次のように記されている。

廣陵郡の東十里の所に住んでいたが、屋敷の南に大きな槐の古木が一本あった。枝も幹も勢いよく繁り、その綠陰は數畝に亘るほどであった。彼は毎日豪傑たちとその木の下で飲んでた。徳宗の貞元七年（七九一）九月のこと、深酒して氣分が悪くなった。その時二人の友人が席にいたので彼を支えて家に歸らせ、座敷の東側の軒下に寝かせた。二人は彼に「さあ、休みたまえ。我々は馬にまぐさをやり、足を洗って君が少しよくなるのを待つて歸るからな」と言った。淳于棼は頭巾をぬぎ頭を枕にのせると、ぼんやりしてきて夢を見ているような氣分になった。

淳于棼は槐の木の下で友人二人と酒を飲んでたが、深酒をして氣分が悪くなり、座敷の東の軒下まで友人に抱えられてくる。普通ならそこで眠ってしまい、夢を見たということになるはずである。しかし、ここでは「淳于棼は頭巾をぬぎ頭を枕にのせると、ぼんやりしてきて夢を見ているような氣分になった」と記されているだけである。原文で示せば「生解巾就枕、昏然忽忽、髣髴若夢」ということで、「若夢」と書かれているだけで、明確に夢を見たとは書かれていない。

それでは、「枕中記」の方はどうであろうか。盧生が枕の穴の中に入っていくときは次のように書かれている。

そのとき、店の主人はちょうど黍を蒸していた。呂翁はそこで袋の中を探って枕を取り出して（盧生に）渡し、「おまえさん、わしの枕で寝てみなさい。おまえさんに思ひどおりの榮耀榮華をさせてあげよう。」と言った。その枕は青い色の焼き物でできており、兩端に穴があいていた。盧生が頭巾を下ろして枕につけると、その穴が次第に大きくなり、明るくなるのが見えた。そこで起き上がってその中に入り、かくて自宅に着いた。

これは、枕の中の世界に入っていく様子を描いたところであるが、「盧生が頭巾を下ろして枕につけると、その穴が次第に大きくなり、明るくなるのが見えた。そこで起き上がってその中に入り（生俛首就之、見其窟漸大、明朗。乃舉身而入）」と書かれているだけでえ、夢を見たとは書かれていない。しかし、枕の中の世界から出てきた時には「盧生は

あくびをして目を覺ました(盧生缺伸而悟)」と記されているのである。したがって、「盧生が頭巾を下ろして枕につけ」たときには眠りにつき、そのまま枕の中の世界、すなわち夢の世界に入ってしまったはずである。

(2) 「離魂記」と「南柯太守傳」の共通點

「離魂記」は、「南柯太守傳」とはジャンルの違う物語とされてきたため、この二つを比較検討した論文は無く、また、物語上の展開や構造にも共通點は認められない。しかし、倩娘の體驗した現象に着目すると、次のような二つの共通點が見られるのである。

- ① 一人の人間が二人に分かれ、一方が活動している時にはもう一方は眠ったようになっていて、目を覺まさない。
  - ② 物語の終盤において自分が二つに分かれていることに気づき、分れた二人が合わさることで目が覺める。
  - ③ 一方が置き去りにされているのに、もう一方は普段と變わらない日常生活を送り、子供も生まれている。
- それでは、上に舉げた共通點について見ていきたい。

1

まず、①の點についてであるが、「離魂記」に、魂の抜けた倩娘は王宙と一緒に蜀へと駆け落ちし、四、五年して倩娘の父張鎰の元へ駆け落ちしたことを謝りに歸ってくる。その際に倩娘の父が魂の抜け出た倩娘の身體を指して次のように發言している。

倩娘は病氣で數年間、寢間に臥せったままで。何というでたらめを言うのだ。<sup>(9)</sup>

このことからすると、魂が肉體から抜けると、病に罹ったような状態になり、意識不明となるようである。また、魂が肉體に戻るまでは目を覺まさないらしい。淳于棼が家に歸ったとき、自分の體（原文では「己身」となっている）が軒下に横たわっているの見たとされているところからすると、見るという行爲の主體であるもう一人の自分は「魂」だったと考えるべきであろう。

このような状態にあったのは、實は、淳于棼だけではなかった。友人の田子華もおそらく同じ状態だったのである。周辨は槐安國で病死し、現實の世界でも病死していたが、淳于棼が現實の世界に戻ってから訊ねさせたところ、田子華は「田子華も病氣で床に伏せていた（田子華亦寢疾于牀）」とあり、魂の抜けた倩娘の肉體の状態と同じであった。そして、田子華の魂はまだ槐安國にあったと考えられるのである。

2

次に②の點についてであるが、「離魂記」では、倩娘が目を覺ますときのようすを次のように表現している。

（衡州に）着くと、宙は先に一人で鎰の家へ行き、まず事情を述べてあやまった。すると鎰は言った。「倩娘は病氣で數年間、寢間に臥せったままで。何というでたらめを言うのだ！」宙が「でも現に舟の中にいるのです！」と言うと、鎰はびっくり仰天、すぐに調べに行かせた。確かに倩娘は船の中におり、朗らかな顔つきで、使いの者に「お父さまはお元氣ですか。」と尋ねた。使いは不思議でならず、ひた走りに走って、鎰に知らせた。部屋の中に入った娘は知らせを聞くと嬉しそうに立ち上がり、化粧をし替えた。にこにこ笑うばかりで何も言わずに部屋を出る

と、そこへ歸つて來た倩娘と互いに迎えあい、びったりと合體して一つになり、着物もすっかり重なった。<sup>(10)</sup>

倩娘が目覺める際には、まず、肉體を離れた魂と魂の抜けた肉體が近づく、次に、肉體を離れた魂と魂の抜けた肉體が合體する、そのような経過をたどる。

それでは「南柯太守傳」ではどうであろうか。淳于棼が夢から覺めるシーンは以下のように書かれている。

すると急にトンネルから外に出て、故郷の村里が昔のままなのが目に入った。懐かしさに切なくなり、思わず涙と流していた。二人の使者は彼を車から降ろした。彼は家の門に入り、そのきざはしを上ってみると、自分の體が、表座敷の東の軒下に横たわっている。びっくり仰天、恐ろしくて前に足が進まない。すると二人の使者が彼の姓名を大聲で二、三回呼んだ。そのとたん、彼ははっと我に返り、目がさめたのである。<sup>(11)</sup>

淳于棼が二人の使者に連れられて古い槐の木の下から出てきて自分の家に歸ってくると、自分の肉體（己身）が表座敷の東の軒下に横たわっているのを見るのである。

いくつかの相違点がないわけではないが、基本的には倩娘と同様に、まず、肉體を離れた魂と魂の抜けた肉體が近づく。次に、肉體を離れた魂と魂の抜けた肉體が合體する。そのことよって夢から覺めるのである。「離魂記」においても、「南柯太守傳」においても、物語の終盤で主人公の魂と肉體が分離していることが分かり、「南柯太守傳」ではっきりと「魂」とは書かれていないけれども、魂が肉體と出會い、再び一つになって目が覺めるということになっているのだ。

最後に、③の點についてであるが、「離魂記」では、「それから五年、二人の息子にも恵まれたが、父の鑑とは音信不通のままだった」とあるように、倩娘と王宙は蜀へ駆け落ちしたあと、二人の子寶に恵まれている。

後から分かることであるが、實は、倩娘は、王宙が旅立ってすぐに、その魂が肉體から離れて王宙を追いかけて行ったのである。したがって、王宙は蜀で暮らした五年間、肉體を持たない魂の状態の倩娘と過ごしていたのだ。つまり、倩娘は肉體を持たずに子供を作ったということである。

一方、「南柯太守傳」の淳于棼であるが、國王の次女（實は蟻）との間に五男二女をもうけている。

淳于棼には五男二女ができ、息子は父の仁徳によって官職を授けられ、娘も王族に嫁いだ。その輝かしい繁榮は、當代の最高を極め、他に並ぶ者もないほどだった。

肉體を離れた淳于棼も蟻と交わって子を成したのである。

以上のように「離魂記」と比較検討したことから導き出されるのは、「南柯太守傳」の淳于棼は、「枕中記」の盧生のように夢を見て、夢の世界で生涯を過ごしたのではなく、「離魂記」の倩娘のように魂が肉體から離れ、魂だけが槐の樹の穴の中の蟻の巣に入って行って蟻の世界で数十年の年月を過ごし、ふたたび現實の世界に戻ってきて、「表座敷の東の軒下に横たわっている（臥於堂東廡之下）」「自分の體（己身）」と一體になり、夢から覺めたと考えられるのである。

それでは、當時の中國人は「離魂」をどのような現象だと考えていたのであろうか。

(3) 「離魂」とはどのような現象か

當時の中國にとって、「離魂」とはどのような現象であったのだろうか。そのことについて調べる力は論者にはない。そこで、次の三つの論著によって確認することにしたい。

- ① 岡本不二明、「離魂と還魂——「離魂記」から「金鳳釵記」まで」<sup>(1)</sup>
- ② 大形徹、「魂のありか——中國古代の靈魂觀」<sup>(2)</sup>
- ③ 前田あゆみ「唐代傳奇小説『離魂記』考」<sup>(3)</sup>

岡本不二明氏「離魂と還魂——「離魂記」から「金鳳釵記」まで」によると、「肉體から魂が抜け出る」という概念自體は紀元前から信じられていたようであり、『楚辭』の中に魂が抜け出た人物の話が載っているとのことである。

『楚辭』に収録されている「離騷」や「招魂」などの作品からみると、古代中國において極度の悲哀や苦惱は、人の魂を肉體から遊離させ飛散させる、と一般的に考えられていたようである。(傍點…論者)

岡本氏によると「極度の悲哀や苦惱」というような精神的に極度のストレスを抱えた時、古代中國においては一般的に、人は肉體から魂が抜け出ると考えられていたようである。

また、大形徹氏は『魂のありか——中國古代の靈魂觀』の第二章において、次のように述べている。

人が死ねば魂はぬけだしてしまふと考えられていた。ぬけでてしまった魂を呼びかえすことを「復(かえす)」という。後漢の鄭玄は「魂を招く」と述べる。儒教の經典である『儀禮』土喪禮や『禮記』喪大記等によれば、人が



死ぬと屋根にのぼり、生前の衣服をひらひらさせ、「おおい某、復っておいで」と呼ぶ。魂がそれに気づくと衣服に依りつき、それで死者をおおうと生きかえることがあるとされる。(中略)つまり死者の魂が尸體にもどってこないことで「死」が確定するわけである。

この記述によると、人が死ぬと魂は肉體から抜け出すが、魂が肉體に戻ると生き返る。しかし、魂が完全に肉體から離れ、二度と戻って来なくなると死に至ると考えられていたようである。ともかく、漢代あたりにおいては魂が肉體に有るか無いかによって、死者と生者が區別されたということである。

しかし、時代が下っていくにつれ魂と肉體の關係は變わっていく。上に挙げたように、古くは、魂が抜けることで「死」が確定すると考えられてきたが、晉代以降になると、魂が抜けても肉體自體は生きている状態にあると考えられるようになる。前田あゆみ氏は「唐代傳奇小説『離魂記』考」において次のように述べている。

生きた體から魂が抜けると病氣になりやがて死に至るといふ觀念は晉代の『抱朴子』に見られ、睡眠中に離魂現象が起きるといふ觀念も、同じく晉代の志怪小説『無名夫婦』に見られる。さらに強い思慕によって離魂が引き起こされるといふ觀念は六朝・宋の頃の志怪小説「龐阿」へと受け継がれている。

晉代からは睡眠中に魂が抜け出すことがあるとされ、魂が抜け出てもしばらくは生きているが、時間が経つと死んでしまふと考えられるようになる。そして、隋代になると眠っている間に魂が抜け出してしまふと眞劍に信じられるようになる。

また、大形徹氏の先の書によると、隋の醫家巢元方が編纂した『諸病源候論』卒魔候に、次のようにあるとのことである。

卒魔とは、屈しんげんることである。夢の中で鬼邪が魔おんま屈まげるようになることをいう。人が眠ったまま目が覺めず、魂魄

が外遊して他の邪鬼に捕らえられ、還りたくても還れない状態となってしまうのは魔である。火で照らしてはいけない。火で照らすと神魂はついに戻って来られなくなり、死んでしまう。(ルビ：原著)

また「魔不寤候」にも、次のようにあるとのことである。

人は眠れば魂魄が外遊し、鬼邪の魔屈るところとなる。精神の弱いものはそのままずっとめざめずに、「氣」がにわかにならぬ。傍らの人が助け喚び、方術を行えば蘇る。(ルビ：原著)

隋代には睡眠と離魂は深いかかわりを持った現象として考えられ、眠っている間に何らかの原因で魂と肉體が分離し、離れた魂が鬼邪に捕らえられ、肉體に戻って来られなくなると死んでしまふと考えられており、それを「魔屈」と呼んでいたことが分かる。

三氏の論考をもとに離魂現象をまとめてみると、古代の中國人は次のように考えていたようだ。

- ① 生きている人間が何らかのストレスを抱くことで魂が遊離する
  - ② 魂が肉體から離れると意識が無くなり、目が覺めなくなる
  - ③ 外へ出た魂が戻ってこない、肉體は死んでしまふ
- これらのことを踏まえて、もう一度「南柯太守傳」を見てみたい。

#### (4) 「離魂」という觀點から見た「南柯太守傳」

改めて「南柯太守傳」を見てみると、どのようなことが見えてくるのだろうか。ここではそのことについて見てみたい。

まず、蟻の巣の中で日常生活を営むためには、少なくとも蟻と同じサイズにならなければならぬ。ちなみに、蟻の巣を掘り起こしたとき、蟻の王の大きさは「長さ三寸ばかり（長可三寸）」と書かれており、蟻にしてはかなり大きい。しかし、それにしても人間の體は大きすぎる。したがって、肉體を捨て去り「魂」の状態となる必要があったのではない。つまり、魂が肉體から離れると、肉體という制約を受けなくなるため、蟻の巣のような小さな世界へ入って行くことが可能となる。

また、友人二人のうち周辨は槐安國にて檀羅國との戦いの後で病死し、目が覺めた後、現實の世界では病によって亡くなっているのも、魂が肉體から離れたまま肉體に戻れなくなってしまったからだと考えられる。つまり、「屈魔」と同様の現象が起き、魂が肉體に戻れなくなったため、結局は病によって亡くなったということである。

さらに、もう一人の友人田子華は、淳于棼が現實世界に戻ってきて様子を尋ねさせたところ、病に倒れて意識不明の状態になっていたが、このことも、淳于棼が歸ってきた後もまだ槐安國に滞在し續けており、魂が肉體に歸ってきていなかったからだと考えれば、説明がつく。

「南柯太守傳」には、それまでは全く氣付かれなかったが、葉山恭江氏が指摘したことで初めて明らかになった謎が

ある。それは、淳于棼が蟻の世界に入っていくとき、その年齢は四十四歳であったが、入って行ってすぐに、「少年」と呼ばれている。それはなぜなのかというものである。

この点について、葉山恭江氏は「南柯太守傳」の時空と語りの枠―生き直させられた夢<sup>⑨</sup>」において次のように述べている。

淳于棼は夢を通じて槐安國へ入っていくときに、時間を遡って「少年」とならなくてはならなかった。淳于棼は夢に入る前の現實世界で「遊俠之士」として若い頃から勝手氣ままな生活を送っていた。それは「少年」の姿である。ところが、夢の中の槐安國では、善き政治を執り行う「士大夫」として人生を送った。(中略) 以上のように考えるならば、淳于棼が槐安國と現實を移動する際には、行きも歸りも(槐樹の洞の中で)時間を遡る動きが生じていることになる。

つまり、夢を見て槐樹の洞の中に入っていくときに四十四歳から「少年」と呼べる年齢まで時間を遡ったのではないかと考察しているのである。

「南柯太守傳」を離魂の物語としてみると、淳于棼は精神的に「少年」であったため、魂が肉體から離れたときに、その魂が「少年」の姿をしていたということではないだろうか。そして、魂が現實の肉體と同じく四十四歳にまで成長し、精神(魂)と肉體の年齢が釣り合うようになったため、現實へ戻されたと言ふこともできるのではないか。

## 結論

これまで検討してきたことから、淳于棼および周辨、田子華たちは夢を見ていたのではなく、魂が肉體から離れたこ

とによって蟻の巢（＝槐安國）という現實世界に實際に存在する特殊な空間に入って行き、滞在していたと考えることができるのである。

蟻の巢（＝槐安國）から現實の世界に戻ったとき、「南柯太守傳」の淳于棼が半ば人生に絶望した形で道門に身を寄せていつている。

淳于棼は南柯の夢のはかなさに感じ入り、人の世の移ろいやすさをさとり、それからは道教に心を寄せ、酒色を断つたのである。<sup>(2)</sup>

それに對して、「枕中記」の盧生は次のように、明るい氣持ちを抱いてこれからも生きていく決意をしている。

盧生はあくびをして目を覺ました。見れば我が身はまごうことなく宿で横になっており、呂翁がそばに座り、主は黍を蒸しているがまだ炊きあがっていない、どれもこれも元のままだった。盧生は飛び起きて言った。「なんとあれは夢だったのか。」呂翁は盧生に「望み通りの人生も、こんなものさ」と言った。盧生はがっかりしたように長い間ぼんやりしていたが、やがて、「なるほど氣に入られたり退けられたりという世の途、出世や左遷の運命、成功と失敗の道理、死と生の實情をすっかり悟ることができました。先生はこの夢で私の欲望を抑えようとなさったのですね。お教え、謹んで授かります」と禮を述べた。そして頭を地につけ二度拜禮して去って行った。<sup>(2)</sup>

この違いは、どこから來るのであろうか。それは、彼らが行ったのが現實の世界だったか、それとも夢の世界だったかということに關わっているのではないか。

「枕中記」の盧生の行った異界は（おそらく呂翁自身または枕によってかけられた道術によるものと思われるが）あくまで夢の中の世界であり、盧生の精神世界の中に生じたものである。したがって、異界を経験することによって精神的に成長したとはいえ、夢から覺めたあとの現實世界において、かつて見た夢の世界と關わりを持つことは全くなかつ

たのである。

一方、「南柯太守傳」の淳于棼が経験した世界は、夢のように感じられたが、実際には現實の世界であつた。少なくとも淳于棼にとって蟻の世界（槐安國）で體驗した榮枯盛衰は、人の世界とは異なつてはいるものの、現實世界における體驗だったのである。

盧生と淳于棼の間には、異界から現實世界に戻つた後の人生に大きな差が生じており、この點が兩者における最も大きな相違點と見ることが出来る。特に、淳于棼の場合は、權勢の衰退してゆく狀況というものを槐安國という現實世界で經驗している。そして、その衰退していくさまが、夢でなく現實だと分かつた時、完全に自分の「人生經驗」として身に刻まれたため、淳于棼は人生に對しネガティブな感情を抱いたのではないだろうか。

葉山氏は、先に引いた論考において、次のように述べている。

淳于棼にとつて槐安國での暮らしには、現實世界では父と別れてから遊侠の酒飲みとして暮らすより仕方がなかつた四十四歳までの「十七、八年」の時間を取り戻す意味合いがあるのではないか。つまり、現實の人間界では父という後ろ盾がないために適わなかつた人生を、もう一人の父である槐安國の國王の元で「士大夫」として人生を生きて直す時間だったのでないだろうかということである。

論者もこの考察には賛同する。そして、現實で「父がいる士大夫としての人生」と「父がいない遊侠の酒飲みとしての人生」の二つを同時に體驗したことで、どちらの人生を歩んでも結局は落ちぶれてしまう自分に絶望し、現實で父を求めることを止め、道門に身を寄せたのではないだろうか。

そういった意味において、現實を知つて絶望を抱く「南柯太守傳」は、夢を見たあとに新たな決意を抱く「枕中記」とは異なつて、現實的な物語とすることが出来る。一般的には「南柯太守傳」の方が、蟻の世界に入つて行つて、蟻の

世界で蟻の王様の娘と結婚して子供までもうけ、蟻の國の太守となって活躍するなどといった非現実的な要素が多い作品だと考えられているが、「槐安國」は現實の世界に存在するものとして想定されており、その意味ではより現實的な作品と言える。そして、現實世界での實體驗のほうが夢の世界でのそれよりも、人生をより大きく變えるものとして作用するのではないか。

そう考えれば「枕中記」では、夢から覺めたあと盧生は、これからの人生に對して決意を述べて呂翁と別れ、その後  
の經緯は一切書かれなまま終わるのに對し、「南柯太守傳」では、淳于棼は槐安國での出來事を體験してから死ぬまでの人生が記述されているが、そのことにも納得がいく。この物語を現實での出來事を記した「現實の物語」であると見れば、そのように讀むことも可能ではないだろうか。

淳于棼は、「魂」が肉體を離れて「槐安國」という現實世界へ入って行き、そこに滞在したのであり、淳于棼の體験は現實に起こった事實であって、盧生が夢の中で見たような架空の世界におけるものではなかったのである。

注

(1) 小論は、本學の卒業生の森英雄くんが、自らの卒業論文をもとにして卒業後に書き直したものを、指導教員である門脇が學術論文の體裁になるよう修正補足したものである。したがって、小論の構想、構成、資料などは森くんのオリジナルであり、もしこの小論に取るべきところがあるとすれば、その功績はすべて森くんに歸するものである。なお、小論にあるであろう瑕疵の責任は、最終段階で修正補足校正を行った門脇が負うものである。

(2) 『中國文化論叢』(9) 20～51、二〇〇〇年

(3) 黒田眞美子著『枕中記・李娃傳・鶯鶯傳他』(唐代Ⅱ)『中國古典小説選5』明治書院二〇〇六年

(4) 後三年、當令迎生。小論における原文、日本語譯は基本的にすべて黒田眞美子氏の『枕中記・李娃傳・鶯鶯傳他』(唐代Ⅱ)に従う。

- (5) 復有一女謂生曰、昨上巳日、吾從靈芝夫人過禪智寺。於天竺院觀右明鈔本石作石。延舞婆羅門、吾與諸女坐北牖石榻上。時君少年、亦解騎來看、君獨強來親洽、言調笑謔。吾與窮英妹結絳巾、挂於竹枝上、君獨不憶念之乎。又七月十六日。吾於孝感寺侍侍原作悟、據明鈔本改。上眞子、聽契玄法師講觀音經。吾於講下捨金鳳釵兩隻、上眞子捨水犀合子一枚、時君亦講筵中、於師處請釵合視之、賞歎再三、嗟異良久。願餘輩曰、『人之與物、皆非世間所有。』或問吾民、或訪吾里、吾亦不答。情意戀戀。矚盼不捨。君豈不思念之乎。生曰、中心藏之、何日忘之。群女曰、不意今日與君爲眷屬。
- (6) 二使者引生下車、入其門、升自階、己身臥于堂東廡之下。生甚驚畏、不敢前近。
- (7) 家住廣陵郡東十里。所居宅南有大古槐一株。枝幹修密、清陰數畝。淳于生日與群豪、大飲其下。貞元七年九月、因沈醉致疾。時二友人於坐扶生歸家、臥於堂東廡之下。二友謂生曰、子其寢矣。餘將鉢馬濯足、俟子小愈而去。生解巾就枕、昏然忽忽、髣髴若夢。
- (8) 時主人方蒸黍。翁乃探囊中枕以授之曰、子、枕吾枕。當令子榮適如志。其枕青磁、而窳其兩端。生俛首就之、見其窳漸大、明朗。乃擧身而入、遂至其家。
- (9) 倩娘病在閨中數年、何其詭說也。黑田眞美子著『枕中記・李娃傳・鶯鶯傳他(唐代Ⅱ)』〔中國古典小說選5〕明治書院二〇〇六年
- (10) 既至、宙獨身先至鑑家、首謝其事。鑑曰、「倩娘病在閨中數年、何其詭說也。」宙曰、「見在舟中。」鑑大驚、促使人驗之。果見倩娘在船中。顏色怡暢、訊使者曰、「大人安否。」家人異之、疾走報鑑。室中女聞、喜而起、飾粧更衣、笑而不語。出與相迎、翕然而合爲一體。其衣裳皆重。
- (11) 俄出一穴、見本里閭巷不改往日。潛然自悲、不覺流涕。二使者引生下車。入其門、升自階、己身臥於堂東廡之下。生甚驚畏、不敢前近。二使因大呼生之姓名數聲、生遂發寤如初。
- (12) 凡五年、生兩子、與鑑絕信。
- (13) 生有五男二女。男以門陰授官、女亦聘於王族。榮耀顯赫、一時之盛、代莫比之。
- (14) 『唐宋の小説と社會』汲古書院、二〇〇三年、「第一部第六章」。なおこの部分の初出誌は、『中國近世文言小説論考』所收、一九九五年十二月、「岡山大學文學部研究論叢」第十二號
- (15) 『角川選書』角川書店。二〇〇〇年
- (16) 『福岡教育大學國語科研究論集』(48) 二〇〇七年



(17) この部分の原文は次の通り。「卒魔者、屈也、謂夢裡爲鬼邪之所魔屈。人臥不悟、皆是魂魄外游、爲他邪所執錄、欲還未得、致

成魔也。忌火照、火照則神魂逐不復入、乃至受於死。」

(18) この部分の原文は次の通り。「人眠睡、則魂魄外游、爲鬼邪所魔屈。其精神弱者、魔則久不得寤、乃至氣暴絕。所以須傍人助喚、竝以方術治之、乃蘇。」

(19) 『集刊東洋學』102號、1、21、二〇〇九年十月

生感南柯之浮虛、悟人世之倏忽、逐栖心道門、絕棄酒色。

(20) 盧生缺伸而悟、見其身方偃於邸舍、呂翁坐其傍。主人蒸黍未熟、觸類如故。生蹶然而興曰、豈其夢寐也。翁謂生曰、人生之適、亦如是矣。生憮然良久。謝曰、夫寵辱之道、窮達之運、得喪之理、死生之情、盡知之矣。此先生所以窒吾欲也。敢不受教。稽首再拜而去。